

メイド戦隊☆づき奉仕ファイブ

登場人物

ももち◀忍足 忍(おしたりしのぶ)…武器はクナイ

リリイ◀神内 瞳(じんないひとみ)…武器は魔法のステッキ

にやるたん◀ニヤールック・ホームズ…武器は二丁拳銃

ルイ◀朱鷺織 萌絵(ときおりもえ)…武器はメリケンサック

プリン◀藍舞 央(あいまいなかば)…武器は特になし

長老…加古野 英雄(かこのひでお)

ハマー…虹源 ハマル(にじげんはまる)

ペン太郎…夏冬 芯作(かとうしんさく)

詐欺師怪人サギー

ドラマティック怪人カントック

声のみ…大首領様・園長先生(男女問わず)

※怪人は兼ね役も可能です。

声のみの人物も、人数が多ければ実際に出演しても問題ないと思います。
人数に合わせてやりやすいようにしていただいて構いません。

メイド達「ようこそ！『Gatto di Luna』へ！おかえりなさいませ！ご主人様！」

音楽

客の掛け声や合いの手も聞こえてくる
座っているオタク、ハマーとペン太郎。遅れてやってくる長老

長老「いやーごめんごめん」

ハマー「遅いですが長老」

ペン太郎「もう始まりますよ」

長老「いやー炎の配達員見てたら遅くなっちゃって…あ！にやろたんだ！」

ペン太郎「ちょ、しずかに長老、周りのお客さんの迷惑ですから」

長老「にやろたん！にやろたん！」

ハマー「ダメだ！つれ出しましょう！」

長老を引きずり出していくオタクたち

始まるパフォーマンス。踊るメイド達

ここは『Gatto di Luna(ガット・デイ・ルーナ)』（意味はそのまんまツキネコ）

よくある普通のメイド喫茶…とは少し違ったちよつと変なメイド喫茶である

曲が終わり客の歓声に包まれる店内

ショータイムが終わると、各々の持ち場へ着くためにハケるメイド達

ヲタクの三人組がやってきて

長老「ぬふふ、今日もにやろたんは史上最強の天使。最高オブ最高」

ハマー「なにを言うか！ももちこそが我らの希望！最後の砦ですぞ！」

ペン太郎「いやはや、お二人とも。見苦しい争いは角質を生むだけ。

ここらでやめておきなさい。リリイさんをご覧、今日もあんなに一生懸命。その姿を見ているだけで心が洗われます」

長老「まあ、リリイたそがかわいいのは認める。でもその偉そうな態度は

気に入らないな！」

ハマー「さすがペン太郎氏！最大手の壁サーの主は言うことが違いますな！」

長老「裏切り者！くそめがね！」

ペン太郎「はっはっは、大手になれたのはたまたまですよ。それに我々は、僕が

そうなる前からの同志じゃないですか、水臭いこと言わないで」

長老「お前、いいやつだな！」

ハマー「長老も普通に流されていますな」

ペン太郎「はっはっは」

笑いあう三人

ツンデレメイド、ルイが注文を取りにやってくる

ルイ「ちよつと、さっきからうるさいんだけど。注文決まったの？」

ハマー「おっと、すっかりおしゃべりに夢中になってしまいましたな」

長老「あ、きまったらにやろたんにお願ひするから…」

ルイ 「は？あたしじゃ不満なわけ？！」
ハマー 「長老氏！ツンデレの方をあんまり刺激するような事は……」
ペン太郎 「店員さん、僕はまたあとでリリィたそに頼むので」
ルイ 「はあ？！店員さんって何よ」
ペン太郎 「推し以外は店員さんだと認識しています」
ルイ 「あんたたちがコンセプト崩してどうするのよ」
ハマー 「そうそう、この……この……これ……こちらの方の言う通りで」ざいます」
ルイ 「いや普通に呼んでいいから」
ハマー 「え？じゃあ……なんて呼べば」
ルイ 「ルイって呼び捨てにすればいいじゃない」

3人顔を見合わせる

ルイ 「気持ち悪い！」
長老 「な！き、気持ち悪い……？（キモイ動き）」
二人 「うわ、気持ちわる」
ハマー 「ルイさん、長老氏に気持ち悪いは禁句ですよ！」
ルイ 「はあ？」
ペン太郎 「長老は、その昔好きだった女の子に『だって、オタクなんですよ、気持ち悪いじゃん』と言って振られたことが原因でそれ以来「気持ち悪い」という言葉に過敏反応してしまっんです」
ルイ 「えー?!」
ハマー 「ルイさん、なんとか弁解してはもらえないですかな」
ルイ 「そ、そんなこと言われても……えっと……あ、あのね」
長老 「俺は気持ち悪い……キモイオタク……死んだほうがマシ……」
ペン太郎 「重症だな」
ハマー 「どうするべきか……」
ペン太郎 「あーさっきは……その……そう！「気持ちはルイ」って言ったんですよ」
3人 「え？」
ペン太郎 「だから、『気持ちは、ルイ』ね？」
3人 「え？」
長老 「それってどういう……」
ペン太郎 「だから、その……店員さん、なんとか言ってくてください……」
ルイ 「はあ？そんなのできるわけないでしょ」
ペン太郎 「も……あ、あの……だから、気持ちは、ルイってことですよ」
長老 「んー？」
ペン太郎 「ハマーさんもなんとか言っ……」
ハマー 「え、えっと……長老、『気持ちは、ルイ』ですよ！」
長老 「ん？？」
ペン太郎 「店員さん、お願いします！何か適当に言っ……ごまかしてください」
ルイ 「気持ち悪い（ピンタする）」
ハマー 「ちよっと！」

ルイ、去る

ペン太郎 「ま、まあ…つまりは、別に長老のことを嫌だといったわけではないって
ことです」

ハマー 「そ、そうですな！安心安心」

長老 「ん…」

ペン太郎 「それより注文を決めましょう…」

ハマー 「自分はもう決まっておりますぞ。誰か！誰かおらぬか！」

忍者メイド、ももちがさつと登場

ももち 「お呼びですか、御館様」

ハマー 「うむ。腹が減ったのでな、我にこの『もちもちもちの特製やきおにぎり』を頼めるか」

ももち 「御意。ご注文を繰り返させていただきます。

『たまねぎ』がひとつ…」

ペン太郎 「ん？俺の耳がおかしくなっちゃったのかな…？」

ももち 「え？」

長老 「もちもちもちもち特製焼きおにぎりだろ？」

ハマー 「もちもちもちの特製焼きおにぎり」

長老 「もちもちの特製もちもち焼きおにぎり」

ハマー 「もちもちもちの特製焼きおにぎり」

ペン太郎 「何回言うんだ！結局たまねぎ入ってないだろ！」

ももち 「忍法変わり身の術」

ペン太郎 「いやいや…」

ハマー 「これだから素人は…お主らは黙っているのじゃ」

長老・ペン太郎 「ええ？」

ハマー 「それから、のども乾いたぞ。『もちもちもち入りお抹茶』もほしいぞ」

ももち 「はっ。ご注文を繰り返させていただきます。

『もちもちもちのおもちいりお抹茶』がみつ…」

ペン太郎 「増えてんじやねえか！」

ももち 「え？」

ペン太郎 「だから、えじやないでしょーが！え、じゃ」

ももち 「忍法影分身の術」

ハマー 「ほっほっほ。楽しすぎて頭がおかしくなりそうじゃ」

ペン太郎 「もうおかしくなってるよ」

ハマー 「もちもち、注文は以上ぞ。よろしく頼むぞ」

ペン太郎 「「ぞ」やめろ」

ももち 「はっ」

ももち、去る

ハマー 「イエス、もちもちイズザラスト忍者」

長老 「大丈夫か、あいつ…」

ペン太郎 「こっちのがよっほどヤバイだろ」

ハマー 「あれが良いのですぞ！」

ペン太郎 「会話ができない…でもこの店において貴重な忍者系キャラであることは事実」

長老 「注文決まった!!」

ペン太郎 「うわビックリした」

長老 「みやおろろん（手を振りながら）」

長老の合図とともににやろたんがやってくる

にやろ 「右手に灯るは愛の炎、左手に灯るは勇気の炎。

みんなに笑顔を届けるために、地獄の底からやってきた!

正義の名探偵、ニャーロック・ホームズ。只今参上にやんマ（仮）」

長老 「にやろたん、いつものちようだい」

にやろ 「いつものじゃわからないにやん」

長老 「いつものはいつものだよ」

にやろ 「ちゃんと知らないとお仕置きするにや」

長老 「え、どんなお仕置きかな（尻を出す）」

ハマー 「怖い怖い」

ペン太郎 「しまえしまえ」

にやろ 「にやろは地獄の底からやってきたにやよ?

それはそれはこわーいお仕置きにや」

長老 「ぬふふ…こわーいお仕置き…しょうがないな、じゃあいつもの

『にやにやんと一発!にやぼりたんスパゲッティ』ひとつと、『にやる

びすうおーたー』ひとつ」

にやろ 「了解にやん」

にやろたん、去る

ペン太郎 「これはさすがに…女子じゃなくても」

ハマー 「キモイと思ってしまいますな」

二人 「うん…」

長老 「さ、あとはペン太郎の注文の番だな」

ペン太郎 「あ、そうでしたね!では…（手をたたく）」

リリイ、登場

リリイ 「お待ちせいたしました、ご主人様」

ペン太郎 「リリイ、2日と4時間32分18秒ぶりだね、元気にしていたかい」

リリイ 「はい、おかげさまで」

ペン太郎 「食事の時間になったのでね、頼んでもいいかな」

リリイ 「もちろんです。なんなりとお申し付けくださいませ」

ペン太郎 「では、『リリイと一緒に祈りしよっ☆お星さま風ドリア』と、食後に

『リリイと一緒に午後のひと時ティータイム』を頼む」

リリイ 「かしこまりました」

ペン太郎 「急がなくていいから、気を付けて」

リリイ 「優しいお言葉、ありがとうございます。ご主人様のために精一杯、

がんばって作ってきますね」

リリイ、去る

ペン太郎 「はあー…」

長老 「さすがリリイたそ…」

ハマー 「まさしく正統派。清純派メイド…うっとりしますなあ…」
3人 「癒される…」

プリンがやってくる

プリン 「ご主人様。お待たせいたしましたっ」

ハマー 「プリン氏、乙」

プリン 「お疲れ様です。こちら本日のサービスドリンクです」

長老 「なんだそれ」

プリン 「実は…店長が、新メニュー考案の時に失敗したやつなんだ」

ペン太郎 「失敗作を僕たちに飲ませるっていうんですか」

プリン 「大丈夫だよ、わたしも飲んだけどまずくなかったし」

ハマー 「プリン氏の味覚変わってるから…(二人目配せ)」

2人 「長老、長老、長老…」

長老 「なんでだよ!!」

2人 「長老、長老、長老…」

長老 「くそお…(飲む)んー…んー…」

プリン 「ね、おいしいでしょ？」

長老 「んー…」

プリン 「うふふ」

ハマー 「いやー、長老氏の男気見せてもらいましたな!ペン太郎氏!

(と、さりげなく自分のコップを長老の手に運ぶ)

ペン太郎 「ええ(同じく)」

長老 「なんなんだよ、お前ら」

プリン 「ふふっ、みんな本当に仲がいいんだね。ボ…わたしもこんな友達が欲しかったなあ」

長老 「いや、まずいもん飲ませてくるやつらだぞ!!」

ペン太郎 「まずい?うまいの間違いでは？」

ハマー 「そうです!彼…彼女?プリンさんはおいしいと言っていましたよ!」

プリン 「ひどい!」

プリン去る

ハマー 「長老…(非難の目)」

長老 「ハマー…(非難の目)」

ハマー・長老 「じゃ、ペン太郎」

ペン太郎 「なんでだよ!」

もち 「お待たせいたしました。たまねぎです」

ハマー 「ほっほっほ!」

メイドたちが続々と料理を持ってくる。みな笑いあっている。盛り上がる店内と同時にだんだん照明暗くなり
暗転

2

閉店後の静まり返った店内

ハマー 「いや、トイレで同人誌を読んでいたらすっかり遅くなってしまいましたな。おまた：おや！電気が：
よもや、誰もいなくなってしまったということですかな」

話し声が聞こえてきて、店内奥からメイド達が現れる

ハマー 「むむむ！」

とっさに隠れてしまうハマー

にやろ 「最近、にやろの元に不審な着信がいくつもかかってきているにや」
ルイ 「なに急に」

にやろ 「名探偵ニャーロック・ホームズの推理では、これは間違いなく何者かによる嫌がらせだにや」

プリン 「どうだろうね？」

にやろ 「そこでにや！今日は思い切って嫌がらせ電話の犯人に仕掛けてみようと思うにや」

ももち 「なるほど。して作戦の内容は？」

にやろ 「とりあえず、相手に電話かけてみるにや」

ルイ 「はあ？そんなんで何とかなるの？」

にやろ 「いいから協力するにや！」

ルイ 「あんた一人で掛けるの怖いんですよ」

にやろ 「怖くないやい、てやんでえ」

プリン 「口調が変わってるよー」

そこへやってくるリリイ

リリイ 「皆さん、最近巷を騒がせていいいる詐欺師怪人サギーについての新たな情報が手に入りました！」

にやろ 「それだにや！」

リリイ 「え？」

にやろ 「リリイ！」

リリイ 「はい！」

にやろ 「逆探知の準備を」

リリイ 「へっ？」

にやろ 「間違いないにや。にやろに電話をかけているのはその詐欺師怪人サギーにや」

「何！」

にやろ 「今回のターゲットはにやろというわけにや。しかし、にやろに電話を掛けたのが 運の尽きだったにや。ぎゃふんと言わせてやるにや！」

ルイ 「大丈夫なの？」

にやろ 「リリィ！準備はまだかにや」

リリィ 「できました！」

にやろ 「では、かけるにや」

と、にやろが電話をかけると同時に店の電話が鳴る

リリィ 「あ、電話だ。わたし出てきますね」

プリンと変わるリリィ

リリィの声は奥から聞こえてくる

リリィ 「はい、お電話ありがとうございます。メイド喫茶ガット・ディ・ルーナでございます」

にやろ 「にやー！こいつ、あろうことかうちの店の名前を

名乗ってるにや（電話口を押さえて）」

ルイ 「え？」

プリン 「誰から？（リリィに）」

リリィ 「無言です…」

ルイ 「いや、あの…にやろ？」

「しーっ！（電話に）単刀直入に聞くにや。何の用にや」

リリィ 「え、あの…何の用と言われましても…」

にやろ 「しらばっくれるにや！このわたしをニャーロック・ホームズと知ってる

狼藉か？！」

リリィ 「（電話口を押えて）大変です！にやろさんの偽物です」

プリン 「ええ？！」

リリィ 「どうしましょう」

プリン 「とりあえず何か聞き出そう！」

にやろ 「何とか言ったらどうにや。サギー！」

ルイ 「サギー？！（にやろに）」

にやろ 「静かに！」

リリィ 「大変です！」

にやろ 「みとめろにや！」

リリィ 「サギーです！」

にやろ 「サギーにや！！」

プリン 「サギー？！（リリィに）」

ももち 「…サギーが…2体？！」

にやろ 「こそこそするにやよ、詐欺師…。真正面から決闘といくにや」

リリィ 「遠慮します！（電話を切ってしまう）」

にやろ 「にや！切られたにや！くくくく、バカにしゃがって…」

ルイ 「どうすんのよ？」
にやる 「出撃にや…メイド戦隊ご奉仕ファイブ！狩りの時間にやー！」
にやる、突っ走っていく

プリン 「にやるちゃん！待ってよ〜」

全員にやるを追いかけて走っていく
隠れていたハマーが出てくる

ハマー 「決闘？！詐欺師怪人？メイド戦隊？！なんだそれ…」

机の上の紙を見つけて

ハマー 「詐欺師怪人目撃情報…メイド戦隊心得…これは…！」

暗転

3

夜の秋葉原

買い物を終えた長老とペン太郎が歩いている

長老 「いやー、大量大量」

ペン太郎 「相変わらずのいい買いつぶりですね」

長老 「俺のモットーは買わない後悔より買う後悔だからな」

ペン太郎 「買っても後悔するんですね」

長老 「ところでペン太郎、夏のオタコミ新作の進捗はどうなんだよ」

ペン太郎 「ふっ、やだな長老まだ3月ですよ、白紙に決まってるじゃないですか」

長老 「そうだったな」

ペン太郎 「それよりも春のオタコミダンスフェスタの方は大丈夫なんですか」

長老 「あー、一発やっときますか」

ペン太郎 「一発やっときますか」

激しいダンス。途中で怪人が現れ去っていくが気付かない二人

女の声 「きゃーー」

長老 「いや、違うんです違うんです」

ペン太郎 「通報しないでください」

長老 「俺たちのことじゃないっぼい？」

ペン太郎 「なんでしょう…あっちの方から？声が…」

長老 「行ってみるか」

2人、去る

入れ替わりににやろ、ももち、プリンがやってくる

にやろ 「匂う：匂うにや：」

プリン 「にやろちゃん鼻は利くからね、きっとこの辺りだね」

ももち 「みんな、油断するなよ」

3人、去る

入れ替わりに怪人出現

サギー 「オーレオーレオーレオーレ」

長老 「なんだ、あいつ！」

ペン太郎 「ひいっ」

サギー 「オーレオーレオーレ！事故っちゃってさあ今200万必要なんだよ
用意してくれよお」

ペン太郎 「そんなんに騙されるか！」

長老 「これで勘弁してください！（尻を出す）」

ペン太郎 「なにを出してんだ」

サギー 「金がないなら、今懐に隠している新作のグッズを渡すんだな」

長老 「なぜそれをつっ」

サギー 「オーレオーレオーレオーレオーレオーレオーレオーレ」

ペン太郎 「よるなあああ」

と、ハマーが飛び込んでくる

ハマー 「待てえい！！」

長老・ペン太郎 「ハマー！」

ハマー 「お前たち：大丈夫か！」

長老 「ああ、今のところは…」

ハマー 「良かった！」

ペン太郎 「ハマーさん、ここは危ないです。早く逃げましょう」

ハマー 「下がって。（サギーに）おい、てめえ！」

サギー 「オレ？」

ハマー 「ここで会ったが百年目：この自分がお前を成敗してくれる」

長老 「あいつのこと知ってるのか？」

ハマー 「初対面だ」

長老 「おい！」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ。貴様ごときに俺様が倒せるかな…」

ハマー 「なんだとてめー名を名乗れ！詐欺師怪人サギー！」

ペン太郎 「名前言っちゃったよ」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ。俺様は詐欺師怪人サギー。

好きな食べ物はおれオ、好きな飲み物はカフェラテ」

ペン太郎 「カフェオレじゃないのか」

ハマー 「ふん、やはり最近巷を騒がせている詐欺師怪人はお前のことだったの
か」

長老 「やっぱりなんか知ってたのか？」

ハマー 「少しな…やい、詐欺師怪人、自分と一戦交えろ」

長老・ペン太郎 「は？」

サギー 「オーレオレオレオレオレ。この俺様と戦おうっていうのか」

長老 「何言ってるんだ、やめとけハマー」

ペン太郎 「そうですよ、早く逃げましょう」

ハマー 「自分に、やらせてくだされ！」

長老・ペン太郎 「いや、死ぬ死ぬ」

ハマー 「なんだか…勝てそうな気がするんだ…」

長老・ペン太郎 「勘違い勘違い」

サギー 「いいだろう、ならば死んで後悔するがいい」

ハマー 「後悔するのはお前の方だ」

サギー 「威勢がいいな」

ハマー、カバンからルービックキューブを2つ取り出す

ハマー 「先に完成させた方が勝者だ」

サギー 「…何を言い出すかと思えばくだらん」

長老 「ハマー、お前そんなんで許してもらえんと思ってるのか」

ハマー 「どうした、頭を使うのは苦手か？詐欺師怪人」

サギー 「オレ？」

ペン太郎 「怒らすようなこと言っちゃだめですよ」

ハマー 「…いいだろう。もしも俺が負けたらアキバの街をくれてやる」

ペン太郎 「お前、何様なの？」

長老 「さらっとすごいこと言ったな」

サギー 「ほう…何者だ」

ハマー 「ただのヲタクさ…だがアキバの街はヲタク達でできている。

だから、アキバそのものと言ってもいい」

ペン太郎 「何言ってるかわかんない」

サギー、手を出して

サギー 「よこせ」

ハマー、渡す

ハマー 「長老」

長老 「あ？」

ハマー 「合図を…」

長老 「…お、おう」

沈黙、緊張している様子の一瞬

長老 「…よーい、はじめ！」

ハマー、ものすごい勢いでルービックキューブをまわす
一方、サギーは悪戦苦闘している

ハマー 「うおおおおお」
サギー 「オーレオーレオーレオーレオーレオーレオーレ」
ハマー 「うおおおおお（こっそり完成品とすり替える）」
サギー 「オーレオーレオーレ」
長老 「あ！あいつずるしやがった！くそ野郎だ」
ペン太郎 「いや、でもいいぞくそ野郎！」
ハマー 「おおおおお！そろったああああ！」
長老・ペン太郎 「やった！」
サギー 「バカな…この俺様が…」
ハマー 「やった——！！！」

サギー、ルービックキューブを投げて、ハマーに襲い掛かる

ハマー 「うわああ」
長老・ペン太郎 「ああ！」
サギー 「ふざけるなよ…こんなことで俺が貴様らを許すと思うなよ…」
長老 「ですよね〜」
ペン太郎 「そうだと思いましたが、だってあの人悪い人ですもん」
長老 「これは…本格的にやばくなってきたな…」
サギー 「次はお前たちの番だ…」

ハマー、力を振り絞って立ち上がり

ハマー 「次は…自分の番なり…」
サギー 「ほう、まだ息があったか」
ハマー 「アキバの街は、俺を守るんだ」
ペン太郎 「お前、さっき売ろうとしてたろ」

サギー、有無を言わずハマーに襲い掛かる

ハマー 「うわああああ（倒れる）」
サギー 「次はお前たちの番だ。覚悟しろ！オレオレコール！！」

ハマー、震える体をかばってたちあがりサギーにしがみつく

ハマー 「させるかあああ」

サギー、ハマーに攻撃

サギー 「しつこいやつめええ」
ハマー 「うわあああ！なんでひざばっかり…」
長老・ペン太郎 「ハマー！！」

ハマー、倒れる。サギー、銀行カードを落とし慌てて拾う

長老 「くそ野郎ー！このくそ野郎、よくもくそ野郎を、このくそ野郎！」
ペン太郎 「頭脳勝負って言ったのに…」

サギー 「知ったことか！最後は暴力じゃあ」
長老 「ぐぐっ」

ペン太郎 「くそお…よくもハマーさんを」

長老 「やめとけて握りこぶしがペン持つ形になってるから」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ！今度こそお前たちの番かな？」

長老 「畜生」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ」

長老 「頼むこれで二人は見逃してくれ（ズボンをおろし尻を向ける）」

ご奉仕ファイブ（リリイ以外） 現れる

にやろ 「待つにや」

サギー 「オレ？」

ペン太郎 「はっ！」

長老 「この声は！」

ももちがクナイで牽制、はじくサギー、尻に刺さる長老

長老 「あー！ー！ー！ー！」

ももち 「その者たちから離れろ」

長老 「みや、みやおっくん」

ペン太郎 「何故ここに…」

プリン 「人からお金を巻き上げるだけでなく、大切な本やグッズまで盗んだりするなんて…許せない」

にやろ 「そんな悪いヤツは、にやろたちがお仕置きするにや」

長老 「みやおっくん」

ルイ 「だから早く逃げろって言うてるでしょ！」

ペン太郎 「ひい（腰が抜けて動けない）」

ルイ 「しょうがないわね…！」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ！お前たちがメイド戦隊だな」

ももち 「貴様か…暗黒ブラック団手先の詐欺師怪人サギーは」

サギー 「オーレオーレオーレオーレ。そう、俺様こそが詐欺師怪人サギー。

好きな食べ物はおれお、好きな飲み物はカフェラテ」

プリン 「カフェオレじゃないんだ」

にやろ 「そんな余裕ぶっこいていられるもの今のうちにや」

サギー 「それはどうかな…」

リリイ登場

リリイ 「みなさん！お待たせいたしました！」

にやろ 「リリイ！間に合ったにや」

リリイ 「はい。ちよっとてこずってしまいましたが無事に見つけました」

プリン 「やったあ」

もちも 「よくやったでござる」

ルイ 「さすがリリイ」

サギー 「全員集合というわけか。いいだろう、ここは古くからのしきたりに則つて、貴様らに自己紹介する時間を与えてやる」

ルイ 「…じゃあ、お言葉に甘えて自己紹介といきますか！」

サギーに攻撃するもち

ルイ 「いやちよっと」

もち 「チャンスだったから」

サギー 「お約束お約束。音響お願いします」

メイド達一人一人前に出てきてポーズを決める

ルイ 「いやよいやよも好きのうち、ご奉仕レッド！」

もち 「すももももももの天然水、ご奉仕パープル！」

にやろ 「にやろがお仕置きしてあげる。地獄からのダークキャット、ご奉仕薄いピンク！」

リリイ 「母なる海よ、恵まれし大地よ、森の加護を受けし者たちよ…集え！

青き稲妻の元へ、穢れし魂に等しく滅びを与えんことを。

ご奉仕ブルー！我、汝らを導かん」

プリン 「ぶっちんぷるるんぷりぷりプリン、ご奉仕濃いピンク！」

メイド達 「五人そろって、メイド戦隊☆ご奉仕ファイブ！」

サギー 「オーレオレオレオレ。貴様らの命はここで終わりだ！

くらえ！（五人を割るように攻撃）」

始まる戦闘

長老 「みやおろろん！！」

ペン太郎 「どういうことですか、メイド戦隊って一体…」

ハマー 「説明しよう。彼女たちは一見普通のメイド…しかし、それは世を忍ぶ

仮の姿で、本当はアキバの平和を守るため日夜戦うメイド戦隊だったのだ！」

ペン太郎 「ハマーさん、どうしてそれを…」

ハマー 「いや…実は同人誌に夢中になつて気付いたら閉店までいたみたいで、

色々秘密を聞いちゃった…みたいなの」

ペン太郎 「あれ、ということは店を出た後ハマーさんいなかったんですね」

ハマー 「気づかなくてなかったんか…」

ペン太郎 「ハマーさんってもう空気がみたいな存在だから…」

ハマー 「何、影薄いってこと？」

ペン太郎 「いやいや、いてもいなくても同じというか」

ハマー 「それ悪口じゃーん」

長老 「お前達だまつてる！今にやろたんがピンチなんだよ！」

ハマー 「ああ、長老」

ペン太郎 「どうみても長老が一番ピンチ」

メイド達と長老もサギーの攻撃をくらっている
とその時、ももちがサギーの隙について銀行のカードを奪う

ももち 「隙あり！」

サギー 「！」

長老 「あいつ…いつの間に！」

ペン太郎 「さすが忍者ですね」

にやろ 「ももち、銀行口座を凍結してくるにや」

ももち 「承知」

ハマー 「さすがですな、やっぱり我が見込んだだけのことはありますな」

ももち 「貴殿のお陰でヤツの隙を見つけたことができた」

ハマー 「え…」

ももち 「先ほどの勝負なかなか熱い戦いだった」

ペン太郎 「見てたなら助けてくださいよ」

ももち 「命懸けの戦いに手を出すほど無粋ではござらん」

サギー 「今、四対一だけどね」

ももち 「では、ご免」

全員 「…」

ももち 「ご免」

リリイ 「謝ってるので許してあげてください…」

ももち 「…くっ」

ももち、去る

ペン太郎 「さっきの謝ってたのか。なんか悪いことしちゃいましたね」

ルイ 「…何はともあれ口座さえ押さえてしまえばもう終わりね」

サギー 「っふっふっふ…」

にやろ 「何を笑ってるにや」

サギー 「詐欺師の口座が一つなどとはおめでたい奴らだ」

と、自分の持っているたくさんカードを出して見せびらかすサギー

プリン 「ああっ」

ルイ 「なら、そのカードをすべてへし折るわ」

サギー 「これがすべてだと、そう言ったか？オーレオレオレオレ」

にやろ 「じゃもう殺そう」

サギー 「や、そういうのはちょっと…」

メイド達 「了解」

サギー 「俺は詐欺師怪人だぞ！知恵で負かしてみたらどうなんだ！」

にやろ 「知ったことか！最後は暴力じゃああ」

サギー 「言ってることが怪人と一緒だあ」

にやろ 「知ったことか！最後は暴力じゃああ」

サギー 「なんで二回言ったの…！」

リリイの元集まるにやろ以外のメイド

ハマー 「ももちは?!ももちは?!」
プリン 「多分、今頃全部の口座を凍結するために走り回ってるんじゃないかな」
ハマー 「…ということは…」
「最初から全部見つけた上での行動だよ」
ルイ 「探してくれたのはリリイだけだね」
リリイ 「詐欺師さんの割には意外と穴が多くてすぐにすべての口座を見つける
ことができました」
ペン太郎 「リリイ…素敵だ…」
長老 「あの怪人、頭悪そうだったもんな」
ルイ 「確かに」
ハマー 「ももち…早く戻ってきておくれー」
ペン太郎 「そういえば…みなさんがメイド戦隊だっていうことは僕たちにバレて
大丈夫だったんですか？」
ルイ 「何言ってるの、別にわたしたちは隠れてメイド戦隊やってないわよ」
ペン太郎 「え？」
長老 「でも、普通こういうのってなんか隠れてやってるイメージっていうか」
ペン太郎 「バレたらまずいみたいなの、ありますよね？」
にやろ 「にやろたちは自分のやっていることになんかの後ろめたさもないにや」
ルイ 「なんか変なことしてるならそりゃあばれたらマズイだろうけど」
リリイ 「街のみなさんに安心して過ごしてもらうために活動してます」
プリン 「ただそれだけ。だから全然大丈夫だよ！」

笑い合う一同
と、ももちが帰ってくる

ももち 「只今帰ったでござる」
ハマー 「ももち…」
にやろ 「おかえりにや。早かったにや」
ももち 「当然だ。そちらも。無事に倒したようだな」
ルイ 「余裕だったわよ。そっちは？」
ももち 「問題なく、全て冷凍庫に」
全員 「…」
にやろ 「よくやったにや、ももち！」
ももち 「(誇らしげに)へへ…」
リリイ 「では、今日も何事もなく無事に終われたことですし、
店に帰って打ち上げでもしましょう」
プリン 「やったあ！」
リリイ 「…みなさんもうどうですか？」
長老 「え、俺たち？」
リリイ 「今日勝てたのはみなさんのお陰ですから」
長老 「あ…どうする？」
ルイ 「なに遠慮してんの。店にいる時とはえらい違いね」
長老 「だって…なあ？」
ペン太郎 「そうですね、なんだか申し訳ないというか…」
ハマー 「でも…まろもまざりたいぞ！」

ペン太郎 「「ぞ」をやめろて」
リリイ 「ぜひ来てください」
ルイ 「こんなにリリイが積極的になるなんて珍しいわね」
プリン 「ルイちゃんのみんなに来てほしくないの？」
ルイ 「別にあたしはあんたたちなんか来てほしいとは思ってないわよ」
ルイ 「来たのなら勝手にくればいいじゃない。でもあたしは相手しないからね！」
プリン 「素直じゃないんだから」
にやろ 「ツンデレさんはほっといてみんな楽しんでむにゃ〜」
ルイ 「はあ、なにそれ！ちよっと〜」

わいわいと出ていく一同
一瞬誰もいなくなるが慌ててハマーが戻ってくる

ハマー 「自分としたことが、まったくうっかり屋さんなんですから」

忘れ物を取りにきてまた戻ろうとする。が、何かの気配を感じ振り向く

ハマー 「気のせいかな…」

暗転

声 「カーツカツカツカツカ…第一話完…続いて第二話、よーい、アクション…！」

響き渡る不気味な声。そこには、新たな敵——ドラマティック怪人カントックの忍び寄る黒い影があった…

4

メイド喫茶

席に座っている長老、ハマー、ペン太郎の3人

ペン太郎 「なんだか、この前の一件以来メイドさんたちとの距離が縮まった気がしますね」

ハマー 「うんうん」

ペン太郎 「…それなのに！リリイたその姿が見えないのは何故なんですか！」

長老 「嫌われてるんじゃないかね？」

ペン太郎 「そんな馬鹿な！」

ハマー 「さっきのイベントタイムにもいなかったし、休んでるだけかも」

長老 「会いたくないから隠れてるのかも！」

ペン太郎 「そんなわけないでしょう！！」

ハマー 「まあまあ。急に風邪を引いたという可能性もありますぞ。他のメイドに確認してみても？」

ペン太郎 「そうですね…聞いてみまスカ」

そこへ通りかかるルイ

ペン太郎 「あ、店員さん」

ルイ 「だから、店員さんって呼ぶな！」

ハマー 「ルイさん、ちょっと聞いてもいいですか？」

ルイ 「なによ」

ペン太郎 「もう、リリイと5日と13時間49分52秒会っていない。

今日は出勤日のはずだが、どうしていないんだ？」

ルイ 「キモ！ってかなんで出勤日知ってんのよ」

ペン太郎 「企業秘密だ」

ルイ 「はあ？リリイなら風邪で休んでるわよ」

ペン太郎 「何っ！」

ハマー 「ほら、風邪だった！」

ペン太郎 「そうですか…」

長老 「お見舞いに行った方がいいかな？」

ペン太郎 「おおお！」

ルイ 「住所なんか教えないからね」

ペン太郎 「あああ…」

ルイ 「ま、そういうことだから」

持ち場へ戻るルイ

ハマー 「残念でしたな、ペン太郎氏」

ペン太郎 「仕方ありません…今日は別の方に注文を頼みます」

長老 「そうするしかないな…そういえば、プリンも今日休みか？」

いつの間にかいるももち

ももち 「少し、いいだろうか」

ハマー 「あ、ももち」

ももち 「…これは、みなと内緒にしようという話になっているので内密に

お願いしたいのだが」

長老 「あ、ああ…」

ももち 「プリンとリリイが拉致されてしまったのだ」

三人 「ええええ?!」

ペン太郎 「でも、さっき別の店員さんが風邪だって…!」

ももち 「だから内密にとிட்டただろう。そういうことになっているのだ」

ペン太郎 「僕たちに話して良かったんですか…?」

ももち 「隠し事は出来ない性格でな…」

長老 「忍者向いてないね」

ハマー 「今そういう事言う空気じゃねえだろうがあ…!」

長老 「隠し事は良くないと思っつて」

ハマー 「そういう事じゃねえだろうがあ…!」

ペン太郎 「でもももち氏、二人は一体誰に」

ももち 「わからない。わたしがいながら、敵の気配を全くつかめなかった…だがこれが」

長老 「は、果し状?!」
ももち 「ああ、暗黒ブラック団大幹部と名乗る者から届いた。

おそろく二人はそこにとらわれている」

ハマー 「でも、肝心の暗黒ブラック団のアジトがどこにあるかわからないんじゃないじゃ助けに行けませんぞ」

ももち 「裏に」

長老、手紙の裏を見る

長老 「しめた! あいつら間違えて住所書いちゃったんだな」

ペン太郎 「いや、そんなわけあるかい」

ももち 「決戦の日は明日だ。お主たちは危ない目に逢わぬよう十分注意しているのだぞ」

ペン太郎 「これ罷なんじゃ」

ハマー 「ももち…」

ももち 「では、わたしは仕事に戻る」

ももち去る

ペン太郎 「大丈夫でしょうか…」

長老 「心配だな」

ハマー 「自分たちにも何かできることはないものか…」

長老 「みやおくくん」

にやろ登場

にやろ 「にやにや?! 呼んだかにゃん?」

長老 「にやろたん、にやろたん、僕ちゃんたちにやろたん達の役に立てないかな?」

にやろ 「なんにや? 突然」

ハマー 「長老氏!」

ペン太郎 「内密にって言われたじゃないですか」

長老 「だって」

にやろ 「まさか! 聞いてしまったにや?!」

長老 「そうなんだ。だから、なんとか力になりたくて…」

にやろ 「…」

ハマー 「…にやろ氏。自分たちはただのお客だけど、こう見えてメイドのみんなのこと本当に大切だと思っているんですぞ」

ペン太郎 「しかも、推しがさらわれたとなつては、動かすにはいられません」

にやろ 「…みんな…ありがとにゃ」

長老 「にやろたん」

にやろ 「でも、アキバの平和を守り、市民を守るのがにやろたちの役目にゃ。

だからみんなの気持ちは嬉しいけど、戦場に連れて行くわけにはいかな

いにや」

長老 「そんな…！」

ハマー 「自分たち戦う覚悟はできていますぞ」

ペン太郎 「ついにペンしか握ったことのない私がこぶしを握る時が来ました」

にやろ 「絶対にだめにや！ここで待つにや！」

三人 「…」

にやろ 「もしも、どうしてもついでくるといふのなら…先ににやろを倒すにや」

三人 「え…」

見つめあう四人

にやろ 「ほら、できないにや。引きこもりでインドアのオタクには、リアルな戦場は向いてないにや。ヨッシーのクッキーでもやってるにや」

ペン太郎 「絶妙に古いな」

ハマー 「にやろ氏いくつ？」

長老 「みゃーみゃーん（悲しみ）」

二人 「キモイキモイ」

ペン太郎 「そういうとこ」

にやろ 「とにかく、そういうわけだにや。明日は絶対来るにやよ！」

にやろ去る

入れ替わりにルイが飲み物を持ってやってくる

ルイ 「待たせたわね、これ」

長老 「ありがとう」

ルイ 「…なに시켰つらしてんのよ」

ハマー 「いやー…ねえ」

ペン太郎 「はい」

ルイ 「ま、これ飲んで元気出さないよ」

三人 「はあ…」

ルイ去る

と、何かが書かれた紙を落として行ってしまふ

ハマー 「おや？ルイさん…これ…はっ…！」

ペン太郎 「どうしました？」

ハマー 「アジトへの地図だ！」

長老 「何っ！」

ハマー 「しっ。これを使えばリリィたそとプリン氏を助けられるのでは」

ペン太郎 「おお！決戦の日は明日なんでしたよね？」

長老 「よし！そしたら早速今夜にでも出発だ！」

ペン太郎 「さっそく準備に取り掛かりましょう！」

ハマー 「えいえい、」

三人 「おー！しー…！」

暗黒ブラック団アジト

捕らわれているリリイとプリン

そこへ、ドラマティック怪人カントックがやってくる

カントック「大首領様。ご命令通り、もつとも厄介な二人を拉致してまいりました」

天の声「よくやったぞカントックよ…ふはははは」

カントック「カーッカッカッカッカ」

プリン「わたしたちをどうするつもり？」

カントック「黙れ！」

天の声「どんな手を使ったのだ」

カントック「なぐに、あの中に一人、裏切者が潜んでいただけの話です」

リリイ「裏切者？」

プリン「でたらめ言うな！」

カントック「カーッ！」

リリイ「プリンさん！」

プリン「くっ…身体が動かない…」

カントック「しばらくそこで大人しくしている」

カントック、去る

リリイ「一種の催眠術系の技ですね…ここは自分の意志を強く持って聞かないよ
うにするのが大事です」

プリン「…そんなこと、言われても…」

と、飛び込んでくるオタク3人衆

ハマー「待てえい！」

プリン「ハマーさん！」

リリイ「どうしてここへ？」

長老「俺たちもいるぜ！」

ペン太郎「助けに来ました！」

プリン「みんな！」

リリイ「どうしてきたんですか！ここは危険です！」

長老「リリイたそ！プリン！いま助けるぞ！」

2人に駆け寄る3人
と、現れるルイ

ルイ 「あんなたち、何やってんの」

長老 「おおお、ルイ！」

ハマー 「もしやルイさんも二人を助けに？」

ペン太郎 「いやー、これは心強いですね」

ルイ 「ふ、ククク…あはは、あははははは！

そんなわけないでしょ、わたしがこいつらを買ったんだから」

オタ3人 「え?!」

ルイ 「あんなたちも本当に頭悪いんだから。あんな簡単な罠に引っかかって」

ハマー 「罠とはどういうことですか!」

ルイ 「その紙、わざと落とすたのよ。あんなたちをおびき寄せるためにね」

長老 「そんな!」

リリイ 「ルイさん…どうして…どうしてそんなことを!」

ルイ 「ちようどいい人質になるからよ」

プリン 「ルイちゃんが裏切り者なの?」

ルイ 「だったら何」

プリン 「そんなの信じられないよ!なんで!」

ルイ 「うっさい!あんなに関係ないでしょ!」

リリイ 「わたしたち…仲間じゃなかったんですか」

ルイ 「はあ?あーもう正直に言うけどさ、あんなのそういうところ、本当に

むかつくのよね」

リリイ 「え…」

ルイ 「大人しくしてれば手出ししないから。本当に黙ってて」

プリン 「ルイちゃん…」

ハマー 「なんかいつものルイさんじゃない感じがすな」

ペン太郎 「なにかあったんでしょ?」

カントックがやってくる

カントック 「カーツカツカツカツカ。よくやったぞ、ルイ…」

長老 「うおおおなんだこいつ!」

プリン 「あんたがルイちゃんに何かしたの?!」

カントック 「しっかり働かないとなあ…愛する家族のために…(フィルムを

見せる)

リリイ 「映画のフィルム…?」

プリン 「ルイちゃんの家族って確か…」

リリイ 「児童養護施設の「朱鷺織園」です…」

ルイ 「ちよっと!」

カントック 「こいつは『フィルムワールド』…。俺が作り出したもう一つの世界

…いや、牢獄かな…カツカ…」

リリイ 「みなさんに何をしましたんですか!」

カントック 「カツカツカ…」

プリン 「まさか朱鷺織園の子供たちを…」

ルイ 「違う!わたしは望んでここにいるの」

プリン 「そんな…」

ルイ 「余計なことと思ったら承知しないから。あんたたちも！」
オタク3人 「(びくっ) …はい…」

ルイ、去る

暗転

6

決戦当日

もち 「ここが暗黒ブラック団のアジトか」
にやろ 「遅い！遅いにや！！にやにをやっているにや！！！！」

アフロ！！ルイのアフロ——！！」

もち 「にやろ、落ち着いて。アフロではない」

にやろ 「落ち着いていられないにや！！こんな大事な日に遅刻なんて許せないにや！！」

もち 「来る途中でおばあさんに道を聞かれて送って行ってるのかもしれない」

にやろ 「そんなの他の人に任せればいいにや！！」

もち 「ルイは困っている人をほっとけないから」

にやろ 「今はにやろが困ってるにや——！！」

もち 「おすわり」

にやろ 「みゃー…って！にやろは犬じゃないにや——！！」

もち 「だめか…」

そこへ、囚われたオタク3人が来る

ハマー 「助けてー」

ペン太郎 「助けてー」

長老 「助けてー」

3人 「た——す——け——て——ん——ん——」

にやろ 「にや！！」

もち 「あれは！」

にやろ 「あ！なんでここがわかったにや！！にやろはくるにやって言ったにや！！」

ハマー 「ルイさんが落とした紙を拾って…」

もち 「え?!」

にやろ 「なにやってるにやー」

カントックが現れる

カントック 「カーッカッカッカッカッ」

にやろ 「お前何者にや」

カントック 「俺はドラマティック怪人カントック」

もち 「なに」

カントック「お前達の仲間はここで預かっている…返して欲しいか」
にやろ「そんなの返して欲しいに決まってるにや！」
カントック「カーツカッカッカッ！」
もち「たあ！（斬りかかる）」
カントック「カーツト！！」
もち「くっ…」
にやろ「どうしたにや！」
もち「動けない…」
にやろ「え？…お前…なにをしたにや」
カントック「なにに、監督に楯突こうとしたからカットしてやったのさ」
もち「カット、だと？」
にやろ「このにやろ…」
カントック「カーツト！！」

縛られたままのリリイ、プリンが来る

リリイ「みんな！」
にやろ「リリイ！」
プリン「わたしもいるよ！」
もち「二人とも！良かった！」
プリン「それよりも大変なんだよ」
リリイ「実は、ルイさんが…」
カントック「シーン！その場にはいない女の悪口に花を咲かせる女達。
よーい、アクシオン！」
リリイ「あたし、ルイのこと大嫌いなんだよねー」
三人「あー…！！（ペン太郎崩れ落ちる）」
もち「わかる、まじ調子乗ってるよね」
三人「あー…！！（ハマー崩れ落ちる）」
にやろ「のってるのってる」
三人「あ…！！！！！！（長老崩れ落ちる）」
プリン「みんな、正気に戻って！」
三人「え?!」
ペン太郎「そうか！プリンさんはオトコの娘だから効かないんですね！」
長老「たしかに！あいつ、攻撃するとき女達って言うってたもんな！」
プリン「わたしがなんとかしなきゃ」
ペン太郎「でも、どうしたら…」
プリン「そんなの！なんでもいいからやるしかないよ！」
カントック「カーツカッカッカッ！醜い女の姿ほど面白いものはないな！
カーツカッカッ」
もち「だいたい今時ツンデレなんてオワコンなんだよ」
にやろ「流行りってーのをわかってねーよな」
リリイ「言ってるー」
カントック「カーツカッカッカッ」
プリン「たーっ！（体当たり）」

カントック「いてっ！」
プリン「やった！」
カントック「術がきいてないだど?!」
プリン「みんな!こいつの攻撃に惑わされないで!」

はっとなる三人

にやろ「あれ、今にやろ達なんの話してたにや?」

ももち「さあ…」

プリン「良かった!」

ハマー「やつのははくらうと言いなりになってシーンを演じてしまう恐ろしい技

…だが効果はあくまで数分、ほっておいても

そのうち解除されるが、かかっている間が厄介なことに

変わりはないな…」

ペン太郎「いつのまにか解説キャラになってますね」

カントック「カッカカッ…ならば…これならどうだ?」

ルイが現れる

みんな「ルイ!」

ももち「ルイ!なにをやっていたんだ。20時現地集合だと言っただろう」

にやろ「遅刻にやー!」

ルイ「あんたたち、バカ?」

にやろ「にや!」

ルイ「この状況でただ単に待ち合わせに遅れてきたように見えるなんて、

どんだけおめでたい頭してんのよ」

ももち「違うのか」

カントック「ルイは暗黒ブラック団に寝返ったのだ」

にやろ「え?!」

ももち「バカなことを言うな、そんなわけ…」

カントック「本当だ。こいつらのおびき出しも全てルイが手を回してくれたのだ」

ももち「ルイ!嘘だろう?」

ルイ「…」

長老「くっ…」

ルイ「本当にバカよね、簡単に引かかってくれるんだもん」

にやろ「ルイ…どうして…」

ルイ「わたしはね、こんな馬鹿げたことにもう嫌気がさしてたの。

悪いことしてる方が楽しそうだから、こっちにつくことにしたの」

ももち「それは…本当か…」

ルイ「いちいちこんなウソつかないわよ」

ももち「今までともに戦った日々、それさえも偽りだとそう言うのか」

ルイ「は?」

にやろ「ももち…」

ももち「ならば、馬鹿者はお主の方だ!」

ルイに飛びかかるももち。始まる殴り合い

カントック「カーツカツカツカツカッ！いいぞいいぞ！もつとやれ！」

にやろ「本当に…煮え繰り返りそうなくらい熱い女だにや…」

リリイ「どうしましょう…止めないと…」

にやろ「口下手同士、思う存分拳で語り合うといいにや…」

にやろにはルイが本心で寝返ったなんて言ってるようには見えないにや
絶対何か事情があるんだにや」

リリイ「そうかもしれないが…」

にやろ「そんなことより…にやろたちはあいつをなんとかしないとにや！」

カントック「カーツカツカツカツカッ」

プリン「でも、どうやって…近づこうにも攻撃を仕掛けられたら終わりだよ」

にやろ「それが何にも思いつかないんだにや…」

カントック「メイド戦隊もはやこれまで…カツカツカッ…！！シーン4、

始まる仲間割れ…わたしたちいつの間にかこんな溝ができてたんだらう
ね…よいい、アクシヨン！」

プリン「ふざけんじゃねーよ！俺が本当は男だからって適当にあしらいやがっ
て！本当はキモいって思ってたんだろ！！ハッキリ言えよ！」

ハマー「プリン氏がキレた！！」

リリイ「っーかふっうのメイド喫茶でなんで男が接客してんだよ、厨房入れよ」

にやろ「言ってるー」

プリン「…俺だってちやほやされてーんだよ！！！！うらやましいんだよ！！」

おかしいか！！！！」

長老「やめろよ、みんなー！」

ペン太郎「ケンカしているみなさんなんて見たくないですよ！」

にやろ「だいたいてめー前から気に入らなかつたんだよ、何が濃いピンクだ！

完全に色がぶってるじゃねーか！ピンクはあたし1人でいいんだよ！」

プリン「うるせー！ピンクが好きなんだよ！」

プリン、にやろに襲いかかる

にやろ「ちっ」

ペン太郎「何とかしないと…！」

そのままハケるにやろ、プリン、リリイ、長老、ペン太郎

ももち「ルイ！目を覚ませ！」

ルイ「ふん！わたしは別に術にかかっているわけじゃないわよ！

目を覚ますも何も、最初から起きてるわよ！」

カントック「何をしているのだ！早くそいつを倒せ。」

こいつらがどうなってもいいのーか？」

ルイ「うるさい！！その子たちに手出ししたらあんたもただじゃすまさないん

だからね！」

ももち「？…なんの話だ」

ルイ 「あんたには関係ない！」
カントック 「じれったいやつめ…カーッ！」

カントック フィルムに攻撃をする。子供たちの悲鳴

ルイ 「やめて…！」

ももちを振りほどくルイ

ルイ 「従えば手を出さないとって約束したじゃない！！」

カントック 「お前がいつまでもノロノロしているからだ」

ルイ 「騙したの？」

カントック 「お前も身内を騙したではないか。お互い様だろう」

ルイ 「…ふざけないで！」

ももち 「ルイ…なんの話をしているんだ…」

ルイ 「ごめん、ももち。やっぱりわたし…最初から全部一人で片付ければ

よかった…」

ももち 「説明しろ、ルイ！」

ルイ 「…」

ハマー 「ルイさんは…！…ルイさんは、あいつらに大切な家族を人質にとられて

…どうしようもなくなつて、リリースとプリン氏を…」

ももち 「…！それは、まことか…！」

ハマー 「あいつの持つてるフィルム…あれさえ取り返せば…」

ルイ 「余計なこと言っうな！」

カントックさらにフィルムを攻撃

カントック 「情報漏洩にはペナルティだ。カッカッカー」

ルイ 「やめて！」

ももち 「責様…！…ルイ…お主の選択は間違っていない…家族を人質に

とられたら、家族を守りたいと思うのは当然だ」

ルイ 「…」

カントック 「いつまでペチャクチャしゃべっている！もう家族のことは諦めた
のか？」

ルイ 「そんなわけないでしょ！」

カントック 「ならばその女を殺せば解放してやろう」

ルイ 「…」

ももち 「誓うか…？」

カントック 「ああ？」

ももち 「その約束、必ず果たすと誓うか？」

カントック 「ああ、約束だ」

首筋に自ら刃をあてるももち

ルイ 「ダメよ！」

ももち 「ルイ…すまぬ…」

ルイ 「ダメ！…やめて…お願い…」
ももち 「…」

ルイ 「どうしたらいいの…！（崩れ落ちる）」
カントック 「役立たずめ…どうした、お前が死ねば解放してやるぞ（ももちに）」

にやろ、リリイ、プリン、ペン太郎が戻ってくる
カントックにしがみつくペン太郎、攻撃するにやろ

ペン太郎 「うおおおおお！！！！」
にやろ 「にやんにやんキーーーーーック！！！」
カントック 「カーッット！！！」

隙をみて、プリンがフィルムワールドを奪い取る

カントック 「うおっ！」
プリン 「やった！」
カントック 「し、しまった」
プリン 「これさえ取り戻せばこっちのもんよ！早く中の人たちを助けよう」
カントック 「ふ、フッフッフ…そう簡単にいくかな？」
にやろ 「にやにっ！」
カントック 「フィルムワールドに入れるのは怪人か俺が許可をしたものだけだ」
リリイ 「それじゃあ…」
カントック 「さらに！フィルムが壊れるか俺が死ねば、フィルムワールドも
その中の人質も自動的に消滅する！」

全員ハツとする

カントック 「この意味が分かるか？そう！お前たちは俺に手出しできない
ということだ！」

ももち 「くっ…」
カントック 「さあ、どうするメイド戦隊」

と、いつの間にかフィルムを手にしてじろじろ見ている長老

長老 「なあ！入れてくれよー！俺もこの中に入りたいんだ！」
にやろ 「にや！」

リリイ 「何をしているんですか？！」
長老 「やればできる！」

ペン太郎 「話聞いてましたか？！」
カントック 「バカな奴め！」

天の声 「許可のない者の立ち入りはできません…許可のない者の立ち入りは
できません…」

ペン太郎 「なんかアナウンズ流れてますけど！」

長老 「なんでダメなんだよー、入れてくれって！」

天の声 「許可のない者の立ち入りはできません…って気持ち悪っっ！」

なんだ、怪人じゃん。立ち入りを許可します』
全員 「えー！？」
長老 「な！気持ちわ…でもやったー…！」

フィルムワールドに吸い込まれる長老

ペン太郎・ハマー 「長老…！？」
ルイ 「ちよっと…あいつ大丈夫なの？」
リリイ 「でも、これはすごいことです…長老さん…もしかして何とかしてくださいませんか…」
プリン 「見て！中に長老が…！」
にやろ 「おおお、写ってるにや！」
カントック 「ま、まさか…こんなことが…」
ペン太郎 「ああっ！長老さんが消えた！」
プリン 「どうなっちゃったの…」

長老戻ってくる

長老 「ただいまー！」
全員 「早っ！！」
ルイ 「どうなったの…？」
長老 「ぱっちり脱出した」
ルイ 「みんなは？」
長老 「なんか、元居た場所に戻ってこれる仕組みみたいで、もう飛び出る瞬間には別々だったな」
リリイ 「どうして中から出られたんですか」
長老 「出口はあちらって看板があった」
ハマー 「うそでしょ…」
ペン太郎 「長老さん…やりましたね！」
ルイ 「よかった…長老…ありがとう…」
長老 「おおおお、おう！いいってことよ！」
カントック 「こんなことがあったたまるかああああ！」
ももち 「これで心置きなく戦えるでござる」
にやろ 「にや！」
プリン 「反撃開始だね！」
リリイ 「ルイさんも！」
ルイ 「でも、わたし…みんなを…」
にやろ 「にやに言ってるにや！ルイがいなかったら誰がメイド戦隊のセンターをつとめるにや？」
ルイ 「…みんな…」
カントック 「…ち、畜生…こうなったら…ルイ。貴様を術にかけてやる。
やれ！ラストシーン！メイド戦隊死す…！！」
リリイ 「聞いちゃダメです！ルイさん！」
ももち 「ルイ！」
にやろ 「ルイ！」

プリン 「ルイちゃん！」
ルイ 「……」

ルイ、全員に襲い掛かる
戦うメイド戦隊たち

カントック 「カーツカツカツカツカ！無駄だ！奇跡でも起きない限りお前たちの運命は変わらない！」

ルイ 「…奇、跡…？」

にやろ 「ルイの様子が変わったにや」

ルイ 「にげ、て…」

にやろ 「！」

カントック 「さあ！さっさとやれ！」

ルイ以外ストップモーションになる

ルイ 「あれ、わたし…何してんだっけ…確か、みんなと遊んで…

あ、園長先生！」

園長 「萌絵ちゃん。萌絵ちゃんはもうすぐ独り立ちだったわね」

ルイ 「うん、みんなと遊べなくなるのは寂しいけど、わたし頑張るよ！」

園長 「ふふふ、そうね。萌絵ちゃんにはどうしてここが『朱鷺織園』って

いうのか教えてなかったわよね？」

ルイ 「うん…」

園長 「折り鶴は願いを込めて折ることが多いけど、折り紙のトキにはね、

『幸せを呼ぶ』『困難を乗り越える』『未来への飛躍』といった意味が

あるの。ここから旅立っていく子供たちにそんな祈りを込めて

『朱鷺織園』と名付けたのよ。だから、萌絵ちゃんも…」

ルイ 「園長先生…?!先生、待って…！」

ストップモーション解除

ルイ 「だから萌絵ちゃんも…仲間とともに幸せに、どんな困難にも立ち向かい

…未来へはばたくトキのようになってね」

カントック 「あ？」

プリン 「ルイちゃん？」

ルイ、カントックに一撃を食らわす

カントック 「ぐはあ！」

ルイ 「わたしは朱鷺織萌絵！誰の指図だろうと、仲間も、家族も

絶対に傷つけない！！傷つけさせない！！」

カントック 「き、…貴様…なぜ正気を保っていられる…」

ルイ 「知らないわよ、そんなの。けどなんでかわたしには効かないみたいね」

プリン 「どうなってるの」

ハマー 「え、それってもしかして…」
ペン太郎 「ハマーさん…言わない方が長老さんのためかも」
長老 「え？なんでだよ！」
プリン 「あれあれ？長老さん…もしかして…」
にやろ 「にやにや！推し変は許さないにやよ！」
長老 「え、そんなこと絶対しないよ！にやろただだよ」
ルイ 「気持ち悪い！」
長老 「な！気持ち悪い…」

笑いあう一同

天の声 「はーっはっはっはっは…もう勝ったつもりかメイド戦隊…」
ももち 「何ヤツ！」
リリイ 「悪の大首領です…！」
ルイ 「…何か用？」
天の声 「これでおわったと思うな…：…甦れ！カントックよ！」
ももち 「なんだと！」

よみがえり巨大化したカントックの叫び声が聞こえる

リリイ 「…本当によみがえって…」
ハマー 「でっかくなっちゃった」
ペン太郎 「どうするんですか！長老さんがフラグ立てたから…！」
長老 「えー」
プリン 「こうなったら、こっちも巨大化するしかないね。リリイちゃん」
ハマー 「え！」
ペン太郎 「できるんですか？！」
リリイ 「はい…私の魔法で。ただ、この力は巨大化した人物にもものすごく負担がかかってしまって、最悪死に至ります」
リリイ 「プリンさん…」
プリン 「安心してよ。私にだって能力ならある」
ハマー 「能力って？」
プリン 「わたしね、死なないんだよ」
オタ3人 「ええええええ…！」
長老 「なにそれ無敵じゃん！」
ハマー 「チートじゃん！」
ペン太郎 「最強じゃないですか！」
プリン 「こんな時じゃないと役に立てないから」
ももち 「そんなことない。プリンがいてくれて救われている」
プリン 「もー、やめてよ。…ははっ、嬉しいなあ。ありがと」

カントックの雄たけび

プリン 「ほら、リリイちゃん」
リリイ 「(呪文)」

プリン 「へへっ、一発かましてくるね！今のわたしは、ぷつつんプリンだよ」

明かりが射し、プリンが消える

ハマー 「でも、ルイさんと違ってプリン氏には大女優のオーラなんてないし」
ペン太郎 「確かに。あんなバケモノ相手にどうやって戦うんでしょう」

プリンの叫び声（怪獣）

ペン太郎 「お前もバケモノかい！」

長老 「すげえ！！あいつの攻撃が全然きいてねえ！プリンー！がんばれ！」

ハマー 「プリン氏！！がんばれ！」

ペン太郎 「早くやっつけて！！また戻ったらアニメの話しましょう！」

オタ3人 「俺たち、友達だからな！！！」

一瞬の暗転

カントックの雄たけびとプリンの叫び声が混じる

明転するとプリンが倒れており一同プリンに駆け寄る

天の声 「このままではすまさんぞ、メイド戦隊…覚えておけよ」

静かになる

プリン 「へへっ、やったよ」

リリイ 「プリンさん…ありがとうございます。体は大丈夫ですか」

プリン 「やっぱりちよっとたるいかな…」

ルイ 「もう、みんな大馬鹿野郎よ…でも、一番の大馬鹿野郎は、わたし…」

にやろ 「ルイ…」

ルイ 「みんな…本当にありがとう…」

ももち 「問題ない」

ルイ 「うっ…ううう…」

長老 「あれ、またもや胸の苦しみが…」

ハマー・ペン太郎 「…」

プリン 「ルイちゃん、泣かないで」

ルイ 「だって…」

プリン 「ルイちゃんには、笑顔が似合ってるよ」

にやろ 「そうそう」

ルイ 「…うっ…うう…ありがとう…」

プリン 「うん」

リリイ 「早く帰って手当をしましょう」

ももち 「立てるか」

プリン 「うん」

ルイ 「…よし！帰ったらパーティーしよ、パーティー！」

プリン 「ああ！いいね！やろうやろう」

にやろ 「賛成だにや」
リリイ 「みなさんも、来ますよね？」
ハマー 「自分たちは…」
ペン太郎 「もちろん…」
3人 「行きます！」

わいわいと去っていく一同
暗転

7

メイド喫茶
集まっている一同

ルイ 「それでは、今日の勝利を祝して特別ライブの開催です！」
にやろ 「今日にはやろのために集まってくれてありがとうにやん」
ももち 「お主たちの協力がなければこの勝利はなしえなかった」
プリン 「本当に本当に感謝しています」
リリイ 「心を込めて歌います。聞いてください」
5人 「『ここがあなたの帰る場所』」

終わり